

# 書評

サイエンスライティング超入門 ▶ 石浦章一 著

サイエンスライティング超入門／石浦章一 著／東京化学同人 2022/A5判 144ページ 本体1,800円+税

手元のスマホで検索エンジンを使えば、かつてのように汗をかきながら図書館に行くこともなく、大概の情報が得られる時代でもある。研究室が迎える学生の世代も当然のことながら変わってきた。学生たちが実験、研究を始めてなぜか戸惑っている気配を感じるようになった。現象観察を通して、あるいは実験を通して、自らの力で前例のない生の情報を得たのは、もしかして初めての経験？ その結果を過去の論文、知見に基づいて評価をするという作業が新鮮な活動体験？ そのように取れるリアクションを最近見るようになった。試験でもどこかにある模範解答に自分を合わせることに励んできた学生にとって、誰もやったことない実験をやればその結果を知っている人はどこにもいないことに初めて気づいたのかもしれない。Google先生に頼れず、一つの結果を受けて次になすべきことの判断に苦しむ姿を見ることが多くなった。さらに日本の大学院授業においてライティング授業が充実していないこともあって、指導教員側も個々の学生が持つ、結果や議論内容を人に伝えるコミュニケーションの実力を修士論文の作成過程で知るといふ現状が多いのではないかな。

新型コロナウイルス禍中、大学院生にも自宅待機学習が要請された。いつ終わるかわからない中、『理科系の作文技術』（中公新書）、『日本語の作文技術』（朝日文庫）や『段落論』（光文社新書）などを研究室の学生に紹介して、論文を書く上でのコツなどを掴んでおくことを勧めた。残念ながら今の学生にはこうした本は読みにくいのだろうか、実際にはそのメッセージによって学生がこうした本を読んでもくれなかった。結局相変わらず彼らが書く文章の指導で奮闘する羽目に陥っている。今回「サイエンスライティング超入門」を読んで思ったのは、コロナ禍前に出版されて

いてほしかったということ。現在の若い世代に優しい形で、具体的に心構えや迷った際の指針を与えてくれる読みやすい本であるというのが第一印象である。

本書の著者は、サイエンスコミュニケーションを大学院の教育現場に定着させる端緒を作った方である。長年の経験、実際の具体例を交えて、問題解決的に紹介する形で書かれている。自らの言葉で研究や調査結果を人に伝える文章をまとめ、発表するまでのコツを書いた好著となっている。人に読んでもらって、内容をわかりやすく端的に伝えるスキルを学んでほしいという著者の思いが伝わってくる。

学会発表などでは主張したいこと、そして流れと論理をシンプルに見えやすく聴衆に見せることが大事である。本書ではライティングにおいて、リードで書いた文章で語りたことを伝え、中程の研究に関する部分ではできれば専門的なことを噛み砕いて、信頼性のあるデータを示した科学的な根拠をわかりやすく示し、まっすぐ結論を紹介することを推奨している。

ただ多くの方が思うように、コミュニケーションの方法は、単一のものではない。本書に沿ってまずは自ら試して、経験を積むこと。そして回数を積む中で、新しい要素を入れたい、といった思いが生まれてくれば素晴らしい。個性があって然るべきである。こうした本をきっかけに、ぜひ多くの若い世代の人々が、自らの表現で研究の面白さが伝わるようなライティング、プレゼンテーションができるスキルを体得してほしい。話者も聴衆も興奮して、その先が知りたくなるような多くの文章、論文、発表が生まれるのを期待したい。

（渡邊雄一郎 東京大学大学院  
総合文化研究科生命環境科学系）